大平前総理追悼の辞

浜田祐生

「自民党の　派閥にいびり殺されし　盟友（トモ）大平の　み魂　安かれ」これが大平総理死亡時の僕の実感であった。ことほど左様に愚直ともいうべき彼、大平君は、自民党の派閥にいびり殺されたものと思う。彼がもっと横着であったならば、こんなことにはならなかったものと信ずる。彼は馬鹿正直ともいうべきほど真面目な男であったと思う。日々が真剣そのものの通り方であったから、彼は今必ずや天国の花の台（ウテナ）に再生していることと信ずる。

終戦になってから、彼は年二回（歳末とお盆）は、郷里で同志とやっているという讃岐缶詰を贈ってきた。これが死ぬまで何十年と続いたのである。普通の人間にこんなことができるであろうか？　これはちっとやそっとの決心では到底できることではないと信ずる。外相伊東正義君にもこの傾向があることを指摘して置きたい。

僕が興亜院経済局の経済二課勤務時代（昭和十四、五年）、彼は摂家口にあった蒙疆連絡部に大蔵省から派遣されていた。万里の長城を飛行機で越えて僕は張家口に出張したものである。資源に乏しい日本としては、竜烟鉄鉱や大洞炭鉱の開発は緊急の要事であった。張家口では大平君に塞翁閣でご馳走になったものである。万里の長城を越ゆる時、当時流行の「白頭山節」を二首創った。①　万里の長城眼下に眺め　行くや蒙古の雲千里　落つる夕陽に茜雲。②　万里の長城越ゆれば蒙古　成吉思汗は今いづこ　昔王者の夢の跡。

大平君も「あの白頭山節はよく聞かされたものですネー」と笑いながら、話したことを憶い出す。

興亜院時代、大平君は東京に出張でくるたびに僕の家によくきたものである。当時彼は本郷の東京大学の近く

におり、僕は目黒駅から歩いて約十分の、二十軒くらいの海軍士官だけの借家があった水交園というところにいた。何の用事できたのかはおぼえていないが、若干の指導はしたのではなかろうか。総理になってから、瀬田の私邸でお孫さんを連れた和服姿の大平君をよくＮＨＫのテレビで見たものであるが、僕のところにもたまには和服姿できたと思うので、彼は昔から着物が好きであったものと思う。海軍出身の僕のところだけに何故きたのであろうか。彼亡き今日、聞く由もないが、自分は自分なりに考えていることがある。

十四、五年前のことである。僕は昭和四日市石油の役員をしていたので、四十二年二月二十八日夜、「あかはね」（今のホテル東急観光の二階）で大平君に紹介がてら中曽根君と三人で会食したことがある。当時大平君は佐藤内閣の改造で政調会長になる直前で無役であり、海軍省時代、短現六期生として僕の部下だった中曽根君も無官の太夫だった筈。会談の内容は今ではもう忘れてしまったが、とにかく写真まで撮ってあるから間違いない。

五十四年三月二十三日夜、中曽根君と一緒に築地の吉兆で大平総理のご馳走になったことがある。今、通産大臣の田中六助氏は当時官房長官で同席し、盛んに中曽根君の引っ張り込みに努力したものである。あの時、中曽根君がもっと謙虚な気持で大平総理に協力していたら今日の政局はもっと違っていた筈で、全く残念に堪えない。

かつて大平君が「浜田さんの名前を一字もらいましたから不悪」といったことがある。それが次男の裕君である。ところが、自分は祐天寺の祐生である。今もって時々裕生でお歳暮などいただくことがあるが、大平君自身が僕は裕生だと間違って思っていたらしい。とんでもハップンというところだろう。

今、僕の本棚には『春風秋雨』『旦暮斧考』『風塵雑俎』『私の履歴書』『永遠の今』がある。大平君亡きあと、これらの本により故人を偲ぶ他はないのである。嗚呼。

（元昭和四日市石油社長）